

「健幸都市西条」実現への挑戦

～住んでいるだけで健幸になれるまちへ～

西条市自治政策研究所 特定研究員 越智 俊二
特定研究員 林田 美代
特定研究員 高橋 康行
特定研究員 真鍋 彰宏

1. はじめに

近年、健康寿命が注目されており、先進的な都市では10年以上前から健康寿命延伸を目標に掲げ、実際に効果を挙げている。この健康寿命を延伸させるべき理由には、以下の4点が挙げられる。

- ① 「健康」は市民が幸福な生活を営む基準である（幸福を測るバロメーターの観点）
- ② 高齢化に伴い、要介護認定者数が増加する（要介護認定者の数的変化の観点）
- ③ 介護する側の身体的・精神的負担が大きい（介護者の身体的・精神的負担の観点）
- ④ 医療費・介護費の上昇（医療費・介護費の観点）

昨年度の研究では、社会的分野の「つながり支えあい、生きがいをもてる社会」、環境的分野の「自然と出かけたくなる都市空間、アクティブに過ごせる環境」、保健分野の「健康を維持増進するための健やかな環境」の3つの分野に戦略的に取り組むべきと提案した上で、これらの3つの分野を達成するために、次の5つの施策が必要であると指摘した。

- ・つながり支え合うまち（ソーシャルキャピタル）
- ・生涯現役のまち（高齢者の生きがい就労）
- ・自然と出かけたくなるまち（快適な都市空間）
- ・アクティブなまち（運動環境の整備）
- ・健やかなまち（健康を維持増進するために知識の提供と環境の整備）

今年度は、これらの施策に関する事業の実施状況と、本市の現状、先進地の状況を検討し、実現可能性を踏まえつつ、本市にとって効果的であると考えられる具体的な事業を提案する。

2. 本研究の狙いと進め方

（1）昨年度の研究

本市の健康寿命（※要介護認定者数に基づいて算出）は、2015年のデータにおいて、男性が78.3歳、女性が83.5歳と、愛媛県内においては平均的な長さ

であったが、愛媛県の健康寿命（※sullivan法に基づいて算出）は全国的に下位にあることから、本市の健康寿命の長さは全国では下位に位置するのではないかと予測される。

昨年度の研究では、ただ単に数値的目標である健康寿命の延伸だけを目指すのではなく、住んでいるだけで市民が健康で幸せになれる都市であるべきと考え、健康の「康」についてあえて「幸」を使用し「健幸都市」とし、本市の目指すべき都市像を以下のように提案した。

「人々が生きがいを感じ、共に支え合い、心も体も健やかで幸せに暮らせるまち」



図表1 西条市が目指す健幸都市のイメージ図

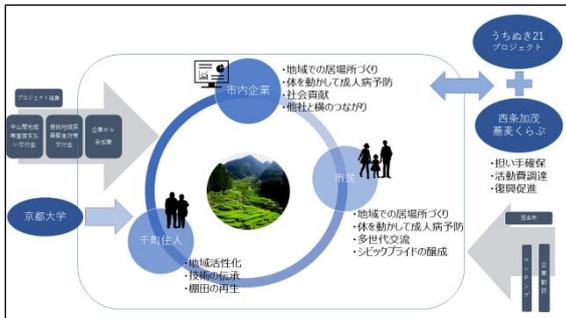
（2）今年度取り組むべきこと

昨年度の研究を踏まえ、今年度どのように研究を進めていくか、事業実施状況や本市の現状、先進地の状況などを検討した結果、「つながり支え合うまち」「生涯現役のまち」「自然と出かけたくなるまち」それに加え、「健やかなまち」の中でも手薄な労働環境部分に取り組むべきと判断した。これらの項目を実現するための施策として

- ・市民が集える場の創出
- ・生きがい就労の推進
- ・企業の健康経営の推進

を掲げ、この3つについて具体的事業を提案する。

成することにより、従業員の健康寿命が延伸することが期待できる。このプロジェクトはすでに千町で活動しているNPO法人2団体の活動に参加する形で、スタートするので、即実現が可能である。また、図表4にあるようにすべての関係者にとってのメリットがある事業となる。



図表4 千町プロジェクトイメージ図

4. 市民が集える場

(1) 本市における「市民が集える場」の必要性

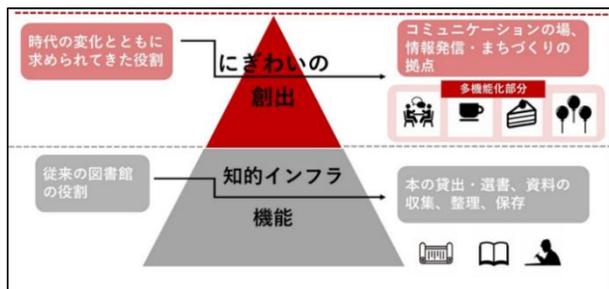
「市民が集える場」を本市に創出することは、「ソーシャル・キャピタルの促進」及び「市民の外出機会の向上」といった2つの要素から意義がある。

「市民が集う場」が整備されることにより、多くの市民にとってコミュニケーションが生まれ、ソーシャル・キャピタルの促進による健康寿命延伸の効果が波及していくことが期待できる。

これらのことから「市民が集える場」を整備していくことで、本市全体の健康寿命にアプローチすることが可能である。

そこで、本研究では、「市民が集える場」として、西条図書館をモデルに提案を行う。

図表6が図書館の役割を示したものであるが、図書館には「知的インフラ機能」と「にぎわいの創出機能」の2つの役割があると考えた。西条図書館においては、「知的インフラ機能」は十分であるといえる。一方、時代の変化とともに求められてきた「にぎわいの創出機能」は弱く、多機能化によってにぎわい創出機能の拡張が期待できる。



図表5 図書館の役割

(2) 図書館を中心においた4つの施策

先述の多機能化によるにぎわい創出機能の強化を図り、西条図書館を人が集い交流する魅力的な図書館にするために、次の4つを提案する。

- ① 規制緩和に基づく常設カフェ店の設置策
- ② 図書館内でのイベント展開策
- ③ 図書館内における快適な空間づくり
- ④ 人が集える場の創設（アクアトピア水系の有効活用）

これらの4つの提案を、民間活力を有効に活用し、具現化できれば、にぎわいの創出が図られ、市民の外出機会の向上や、ソーシャルキャピタルの促進が図られ、結果、市民の健康寿命延伸が実現できる。



図表6 多機能化と健康寿命

5. 生きがい就労

(1) 生きがい就労とその必要性

少子高齢化が進展し、生産年齢人口が減少している現代社会において、国も推進している「生涯現役社会」を実現することが重要になっている。

また、高齢者自身も、社会との関係性を維持させつつ、働く意欲を持ち続けることができることで、個々人の生きがいを持ち続けることにつながる。こうした中で、「生きがい就労」という言葉が社会において大きな意味を持つことになる。

図表7は生きがい就労のイメージであるが働きたいときに無理なく楽しく働けるものであり、地域の課題解決にも貢献できるというものでもあり、生きがい就労の仕組みの構築が必要ではないかと考えた。



図表7 生きがい就労イメージ図

(2) 西条図書館を用いた生きがい就労の仕組みづくり

先述の西条図書館といったシンボリックな場所で生きがい就労の仕組みを構築することは意義があるのではないかと考えた。

内容は、65歳～79歳までの元気な高齢者をターゲットに、西条図書館で、図書館スタッフやイベントスタッフ等登録制の有償ボランティアとして気軽に働いてもらう仕組みである。

高齢者の知識や得意分野をいかしてもらい、本の紹介といったコンシェルジュや、小学生への勉強の指導、文化指導、昔の遊び指導等が考えられる。

効果としては、健康寿命の延伸はもちろんだが、図書館の課題解決、高齢者の活躍の場の提供、高齢者と子供との交流、知識や文化の伝達等多くの効果が期待できる。

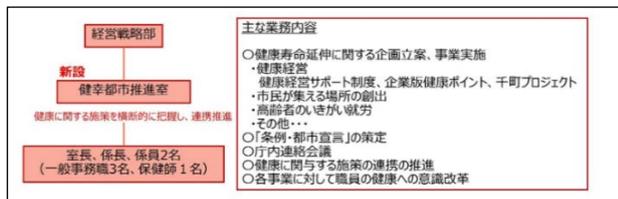
6. 庁内体制

(1) 健幸都市実現に向けた庁内体制

現在実施している健康に関与する事業をより効果あるものにするためには、職員の意識改革や、課を跨いだ事業への展開が必要である。つまり、全庁横断的に取り組む体制の構築が必要であると考えます。

そこで、健康に関する施策を横断的に把握し、課と課の連携を推進していく「健幸都市推進室」を新設することを提案する。

「健幸都市推進室」を企画系の部署である経営戦略部内に設置することで、全庁を横断的につなぎ、課と課の連携を推進していくことができれば、職員の健康への意識も改善され、効率的に健康寿命延伸の施策が展開できる。



図表8 健幸都市推進室の配置、業務内容

7. おわりに

昨年度、本市において『「健幸都市西条」実現への挑戦～健康寿命を延ばす3つの戦略～』の中で、「1. はじめに」でも述べた3つの分野で提案を行い、保健環境の分野にとどまらず、社会環境や環境的分野についても施策の重要性を提案した。

今年度は、昨年度の提案をさらに発展させ、3つの分野の中でも「健康経営」、「市民が集える場」、「生

きがい就労」といった3つの施策の提案に注力した。

このような経緯の下、本研究では、次の提案を行った。

まず、「健康経営」の分野においては、次の3つを提案する。

- ① 健康経営サポート制度、
- ② 企業版健康ポイント制度
- ③ 千町プロジェクト

また、「市民が集える場」においては、武雄市や都城市など先進地の取組を参考とし、西条図書館をモデルとした図書館の多機能化モデルの提案を行った。

さらに、「生きがい就労」においては、健康経営の千町プロジェクトでの指導や、図書館での有償ボランティアとして高齢者の生きがいづくりにつながる提案を行った。

最後に、これらの3つの施策は、健康寿命延伸という目的との軌道修正が常に行われる必要があることから、健幸都市推進室の設置を提案した。

一方で、昨年度提案した終章でも述べたように、健康寿命延伸に向けて取り組む先進地は、一朝一夕には成果が見えないこの取組に10年以上取り組み、具体的な成果を上げ始めている。

しかし、この2年間の研究が先進地との差を埋めることにつながらなかったわけではない。本市でも、健幸社会の実現に向けたSmart Wellness City 首長研究会に本市が加入し、「健康経営優良法人2020」(大規模法人部門)に中四国で初めて認定される変化が起り始めている。

10年以上先を行く先進地自治体との差は大きいですが、本研究は西条市自治政策研究所の試みとして、政策企画までを行った初の事例であり、始まったばかりである。だからこそ、この現状を一日でも早く解消し、本市が日本に誇る健幸都市として発展する一助として、本研究報告書が役立てば大変な喜びである。